

二〇一〇年度中国化学会 大会シンポジウム 近代 における日中文化交流の再検討

著者	阿川 修三, 松村 茂樹, 佐藤 一樹
雑誌名	中国文化 : 研究と教育
巻	69
ページ	79-82
発行年	2011-06-25
URL	http://doi.org/10.15068/00150744

近代における日中文化交流の再検討

日本と中国の文化交流は近代に入ると、その質と量において大きな変化を遂げました。

即ち、質については、従来文化交流が、日本が中国の文化を専ら学ぶという、一方向のものであったのが、近代に入ると、日本が中国に学ぶだけでなく、「近代」化に出遅れた中国が、中国に先駆けて「近代」化を遂げた、



日本の文化を学ぶようにもなり、文化交流は双方向のものに変化しました。そのような交流は、単に日本が中国に学び、中国が日本に学ぶというような単純なものではなく、例えば、近代訳語（西洋の事物、文物の訳語）のように、日本が中国に学んだ成果が中国に学

ばれることもあれば、またその逆のことも起こりうるという、複雑な様相を呈してきました。

また、量についていえば、交通の発達（汽船による日中間の航路就航等）や近代的国交の樹立により、その交流が量的に従来に比して飛躍的に増大しました。

本シンポジウムでは、書物を通じての交流、文物・制度を通じての交流、人的交流という交流の三つの相を通して、近代における日中文化「交流」の様相を考察してみたいと思います。

パネリスト

文教大学（兼司会） 阿川修三
大妻女子大学 松村茂樹
二松学舎大学 佐藤一樹

日中における、十九世紀後半の地理知識受容について

— 『海国図志』、『瀛寰志略』の受容を中心に

阿川修三

十九世紀に入ると、東アジアでは欧米列強勢力の進出が著しくなり、自分たちにとつての世界（天下）、即ち東アジア世界にしか関心の無かった、日本、中国の知識人も、

世界（欧米）の事情に関心を持たざるを得なくなつた。

そのような状況の中で、アヘン戦争後、まず魏源が、来華宣教師が漢文で書いた世界地理の書などに基づき、『海国図志』を著した。中国では出版（一八四四）直後さほどの反響もなく、広く読まれるようになるのは、二、三〇年の歳月を要した。

日本では、蘭学により世界地理の知識の蓄積がある程度あり、更に中国で西洋人の宣教師によつて蓄された漢訳洋書によつて西洋の地理歴史の情報がもたらされた。そして『海国図志』（一八四七年第二版六十巻本）が幕末に唐船で長崎に伝来すると、間をおかず、『海国図志』全編の出版ではないが、その一部の篇が和刻本で出版された。

それは当時日本人の関心があつた地域のもの、すなわち、黒船来航のアメリカを扱つた「墨利加洲部」、北方から進出するロシアを扱つた「俄羅斯国」、アヘン戦争のイギリスを扱つた「英吉利国部」、イギリスの植民地になつたインドを扱つた「印度国部」など部分や、海防を論じた「籌海篇」、軍事技術を扱つた「火輪船図説」、「水雷図説」等が、訓点を付けたり、訓釈されて二十六種類ほど刊行された。そして老中阿部正弘、海防掛川路聖謨などの幕閣から、幕末を代表する知識人、たとえば、佐久間象山、横井小楠、

吉田松陰などの世界地理知識形成に大いに貢献したことは既に諸賢の指摘するところであり、また、その和刻本の種類の多さ、その部数の多さから見ても、幕末の多くの一般の知識人にも読まれ、世界地理知識受容において幕末の日本人に広く影響を与えたことは間違いない。

なお『海国図志』に少し遅れて刊行された、世界の地理書である、徐繼畬の『瀛寰志略』についても、日中での反応はほぼ同様であつた。

このような、日中における、十九世紀後半の世界地理知識受容の相違は、当時の日中知識人の関心のありかの違いの反映というだけではなく、日中文明の本質的違い、就中その世界観の違いに大いにかかわつていよう。（文教大学）

羅振玉と日本の中国書画文墨趣味ネットワーク

松村茂樹

近代中国の考証学者にして書画を善くした羅振玉（一八六六—一九四〇）が、一九一一年から八年にわたる京都での寓居生活を終え、一九一九年六月二十一日、中国に帰国するにあたり、円山公園内の日本料亭・左阿弥で送別会が開かれた。その際、撮影された記念写真には、送別会に参加した計三十八名が写っている。

これらの人々は、各界より集まっており、①荒木寅三郎（鳳岡）・内藤虎次郎（湖南）などの学界（京都帝国大学関係者）、②犬養毅（木堂）・小川為次郎（簡齋）などの政財界、③上野理一（有竹）・西村時彦（天囚）などの新聞界、④富岡百鍊（鉄斎）・長尾甲（雨山）などの文藝・書画篆刻界、⑤佐伯理一郎・木村得善（擇堂）の医学界、⑥原田庄左衛門（大観）・田中慶太郎（救堂）・小林忠次郎などの出版・写真界に大別することができる。

羅振玉とこれらの人々とのつながりは、書画文墨趣味によるものであり、このネットワークが、犬養毅や三浦梧楼（観樹）のような政治家にも連なっているのである。

この送別会の席上、犬養毅は羅振玉に、「あなたはこの国において、いつもただ学術を語り、政治に及ぶことがない今、お別れにあたり、慣例を破って一言いかがか？」と、政治論をうながした。羅振玉はそれに応じ、そもそも、「東方」は内政を重視し、「西方」は外征を推進するという根本的な差異を指摘する。その「西方」の外征により、「東方」の中国は苦しめられているわけだが、実は、当時の日本も脱亜し、「西方」になって、「東方」の中国に外征しようとしていた。羅振玉は、「西方」の外征の結果が「赤化」であるとし、それを否定する。つまり、日本はその徴を踏

むなど言うのだ。

犬養はこの論理に「首肯」する。日本は「東方」であり、「西方」ではないと思っていたからであろう。その根底には、中国書画文墨趣味があり、これにより、「東方」への敬意と尊重を育んでいたのではないか。

この写真に写っている人たちは、中国の書画を好み、それがゆえにつながっている。実は、このネットワークが、当時のいわゆる極端な欧化主義へのアンチテーゼとして、一定の理性的役割を果たしていたと思われるのである。

（大妻女子大学）

教えるつもりが教えられ

―服部宇之吉の漢文・儒教観と中国

佐藤 一樹

服部宇之吉は、後代の評価が大きく分かれる人物である。日中交流という視点からは、漢学者でありながら古典に惑溺することなく、「現実の中国を直視し、客観的に中国および中国人を把握しようとしていた」（山根幸夫）と高く評価された。他方、中国哲学研究史の文脈からは、「絶対主義的天皇制擁護の極端ではあるが高踏かつ空想めいた教義」（戸川芳郎）を広めた東京の漢学の張本人として、ア

カデミズムに徹したとされる京都支那学と対比した厳しい批判を受けた。

二つの相反する評価だが、実は、服部の学問が、学問としてひとつの高みに達していた江戸漢学とは、ほとんど関係性をもっていないという認識においては一致している。

京師大学堂師範館総教習として、中国の近代高等教育の立ち上げに尽力したこと、東京帝国大学の支那哲学講座主任教授として、中国古典研究を西洋近代に由来する学問体系の中に位置づけようとしたことは、それまでの経学を頂点とする東アジアの学問を全面否定する点において、表裏一体の関係にあったのである。

服部は京師大学堂で心理学や論理学を教授したが、これは草創もない帝国大学の哲学科出身者が担当する科目として、当時の通念に沿ったものだった。一八九九年に狩野直喜とともに中国への最初の官費留学生として派遣された体験ともあわせ、北京で教授した経歴は、服部を従前の漢学者と決定的に分かつものとなった。(漢学科出身の狩野の場合、伝統漢学との断絶は服部ほど明確なものではない。)その経歴の重みは、総教習としての功績で清朝から進士の称号を贈られたことに象徴されよう。

考証学で著名な漢学者島田重禮を岳父にもつ服部が、ど

れほど伝統漢学との断絶に自覚的であったかどうかは、窺い知ることはできない。事は服部個人の意図をはるかに超えて、日本の近代文化を徳川時代までの経緯といつたん切り離して創成しようとする、井上毅や浜尾新ら政府当局者の側にあった。したがって服部を「絶対主義的天皇制擁護」の立場にあったと非難するのはあまり意味が無い。戦後官僚政治の得意の手法である外圧を利用した国内改革に似て、文化交流もまた、お互いの文化の紹介にとどまらず、交流しようとする主体そのものにも多種多様な結果をもたらす権力関係が作用することを、服部宇之吉の例は顕著に示している。

(二松学舎大学)